

懐旧

郝秋圃君の雑感「ある華僑の談話を聞いて」を読んで、思わず懐旧の思いを起こした。わたしの感想は決して華僑と海軍の大問題についてのものではなく、その南京海軍魚雷銃砲学校の前身についての、いささかの回憶に過ぎない。

海軍魚雷銃砲学校はたぶん以前の『封神伝』式の“雷電学校”の改称であろう。しかしわたしがそこにいた頃は、まだ“江南水師学堂”と呼んでいた。これはもう二十年前のことである。そのころ魚雷は止めになったばかりで、機関科の学生には兼修だったので、みんなあまり注意せず、それでわたしは今では“白頭魚雷”などといういくつかの名詞のほかは、ほとんどすっかり忘れてしまった。

昔の先生や先輩にはずいぶん忘れがたい人がいて、わたしは極めて尊敬の意を表したいが、公表するのは不都合なので、ただ同学の有名人を数えることにする。勲四等の杜錫珪君が一番豪勢ということになるが、残念ながらわたしが学校に入った年に彼は卒業してしまったから、結局は“荊州を識るに縁なし”であった。同校は三年で、わたしたちより一年早く卒業した人の中には、中將の戈克安君が有名である。またもし友人の言うことに間違いがなければ、現在の南京海軍……学校校長もこのクラスの先輩である。江西派の詩人胡詩廬君と杜君は同年であるが、ただ彼が機関科のクラスであったから、わたしは彼の詩稿を見ることができたのである。ところでわたしのクラスとなると、まだこんなに有名な人物を出したことがなく、それにまた多くは公表に都合が悪いので、一二故人を持ち出すしかない。第一は趙伯先君であり、第二は俞楡孫君である。伯先はのちに陸師学堂に入り直して、革命活動で死んだ。楡孫も京師医学館に入り直して、去年防疫で亡くなった。この二人の友人は折りよく前後して管輪堂〔機関科の学生宿舎〕第一号に住んだので、いつも繋がって思い出すのである。そのころ劉声元君もそこで魚雷を学んでいて、第二号に住んで、毎日楡君と相撲を取っていたが、この情景は今でも目に見えるようだ。

学校の西北の角が魚雷堂のあとで、そばに南向きの三間間口の関帝廟があり、もともとプールであったのだが、二人の小さい学生が溺死したので、校長が埋めるよう命じ、関帝廟を建てて、不祥の霊を鎮めたということだった。廟には一人夜回りが住んでいて、六十余で、都司〔下級武官〕と自称していた。毎日三度管輪堂の湯沸かしに白湯を取りに来て、わたしの鉄格子の窓の外を通り、必ずわたしに頷いて挨拶をした（他の人ともむろん同様だった）。時には自分で飼っている雌鶏が産んだ卵を売りに来た。小洋一角で十六個買えた。彼は人と長毛の時の事を話すのが好きで、彼の都司もたぶんその時に手に入れたのだろう。残念ながら当時わたしはそうした談話の価値を知らず、彼とはあまり話をしたくなかった。今になって思い返すと実に残念なことをしたものだ。

関帝廟の東には何棟か洋風建築があり、それが魚雷廠、機器廠などで、さらに南にゆくと駕駛堂〔航海科〕の宿舎であった。魚雷廠は午前8時に開門で、昼は休み、午後は四時か五時まで開いていた。廠門の中には両側に幾つかの赤いペンキを塗った水雷が置いてあり、そのでかくて鈍

重な印象はいまもって脳裏から消えない。見ればどうらや時代物だが、新式のがどういう様子なのかは、そこではついに見たことがない。工場には多くの職人がおり、毎日そこで魚雷を磨いていた。教師の話では、魚雷の働きは全て銅合金のシリンダーの気圧にかかっているのだそうで、それで彼らが磨くのを見ていて、そんなに擦れば、銅がだんだん薄くなるではないかと、思わず手に汗を握ったものだ。いまではもう買い増したのか、それとも相変わらずもともとあった何個かを磨いているのかは、知らない。郝君の雑感に、“軍火の重地は、秘密厳守で、……ただ魚雷及び機器工場はずっと参観したことがない”と云って、わたしの古い印象とは截然と違い、思わず極めて大きな今昔の感を発したのであった。

水師学堂はわたしが本国で学んだ唯一の学校である。だから回想と懐かしさは格別で、とても一時には言い尽くせない。いまは一二を挙げたのみで、二十年前わたしたち在校の頃の自由でのんびりした日々を記念する。

※初出：1922年8月24日『農報副刊』